

続「上ゲ屋型彫刻刀形石器」考

－上ゲ屋型の研究(4)－

橋本勝雄

はじめに

上ゲ屋型彫刻刀形石器(以下「上ゲ屋型」という)は、石刃ないしは縦長剥片を素材とした先刃形の彫刻刀形石器である。この特異な石器型式は、1961(昭和36)年に発掘調査が行われた長野市上ゲ屋遺跡の出土資料をもとに森島稔らによって提唱され(樋口・森島・小林1962)、その後、森島や鈴木次郎の精力的な研究によって、その実態が徐々に明らかにされてきた(森嶋1966・1973・1975、鈴木1996・2000・2018)¹⁾。

特に、最近では鈴木によって関東地方を中心として分布する上ゲ屋型の理解が深まっている。氏の見解を取りまとめれば、上ゲ屋型の出現時期はナイフ形石器文化の後半から終末期、遺跡分布は南関東(相模野・武蔵野台地)と静岡県東部を核として、北は東北南部・信州方面、南は磐田原台地に及び、搬入品で交流の産物と目される赤玉石・黄玉石などの特殊な石材が多用されたという。

以上の見解を受けて、筆者はこれまで上ゲ屋型の遺跡分布、技術・石器石材を検討し、併せて領域と集団の動態にも言及してきた(橋本2010・2016・2018b)。

本稿も、その一環であり、新資料の紹介を踏まえて前稿を改定し、当該研究をさらに拡充したい。

1 新資料の紹介(第1・2図)

今回の追加資料としては、神奈川県大和市大和配水池内遺跡(麻生2012)・同相模原市光明学園遺跡(三ッ橋2002)、千葉県八街市鶴ヶ里I遺跡・同茂原市内野第I遺跡(津田ほか1990)、群馬県桐生市梨子木L遺跡(加部・新井2016)、茨城県常陸大宮市野上槻遺跡、栃木県河内郡上三川町多功南原遺跡(山口1999)がある。このうち鶴ヶ里Iは匝瑳市在住の高野安夫氏、野上槻は那珂市在住の渡辺明氏による採集品である。なお単独資料が大半であり、複数資料は内野第I例にとどまる。

(1)大和配水池内遺跡 2号ブロックから出土した。出土層位は第1ローム硬質部(L₁H)である。砂川期の小型尖頭器・ナイフ形石器と共存しているが、石器

群の主体はナイフ形石器である。

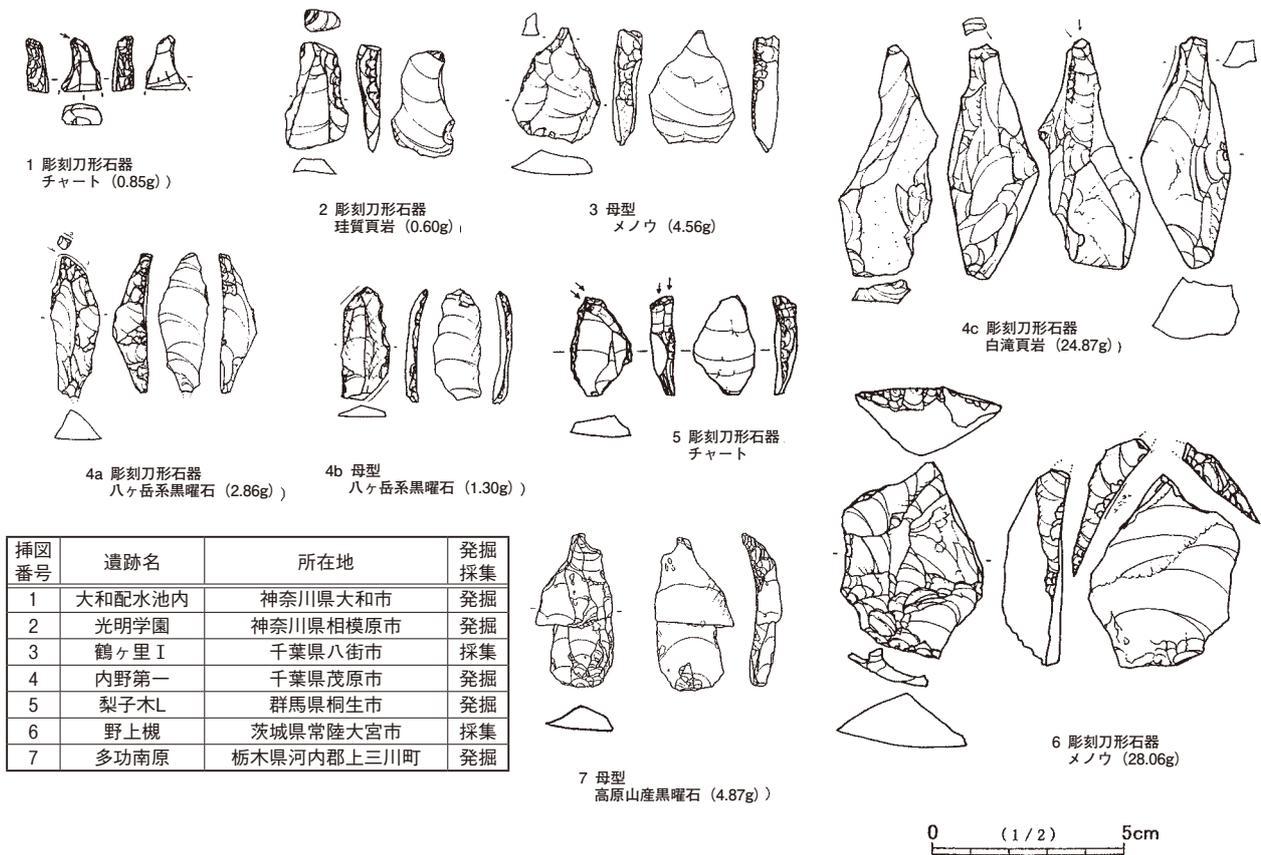
当該資料については、報文ではナイフ形石器の基部と紹介されていたが、鈴木次郎が指摘したように(鈴木2018)上ゲ屋型の先端部破片である(報文天地逆)。

大きさは長さ1.4cm・幅1.0cm・厚さ0.85cm・重さ0.85gを測る。石材は良質なチャートである。石刃を素材としており、右肩に一条の彫刻刀面が作出されている。大きさは長さ0.5cm・幅0.3cm、打角は60°である。彫刻刀面のバルブは残存しており、末端は挟入状剥離によって切られている。先端に使用痕(磨耗)がみられる。

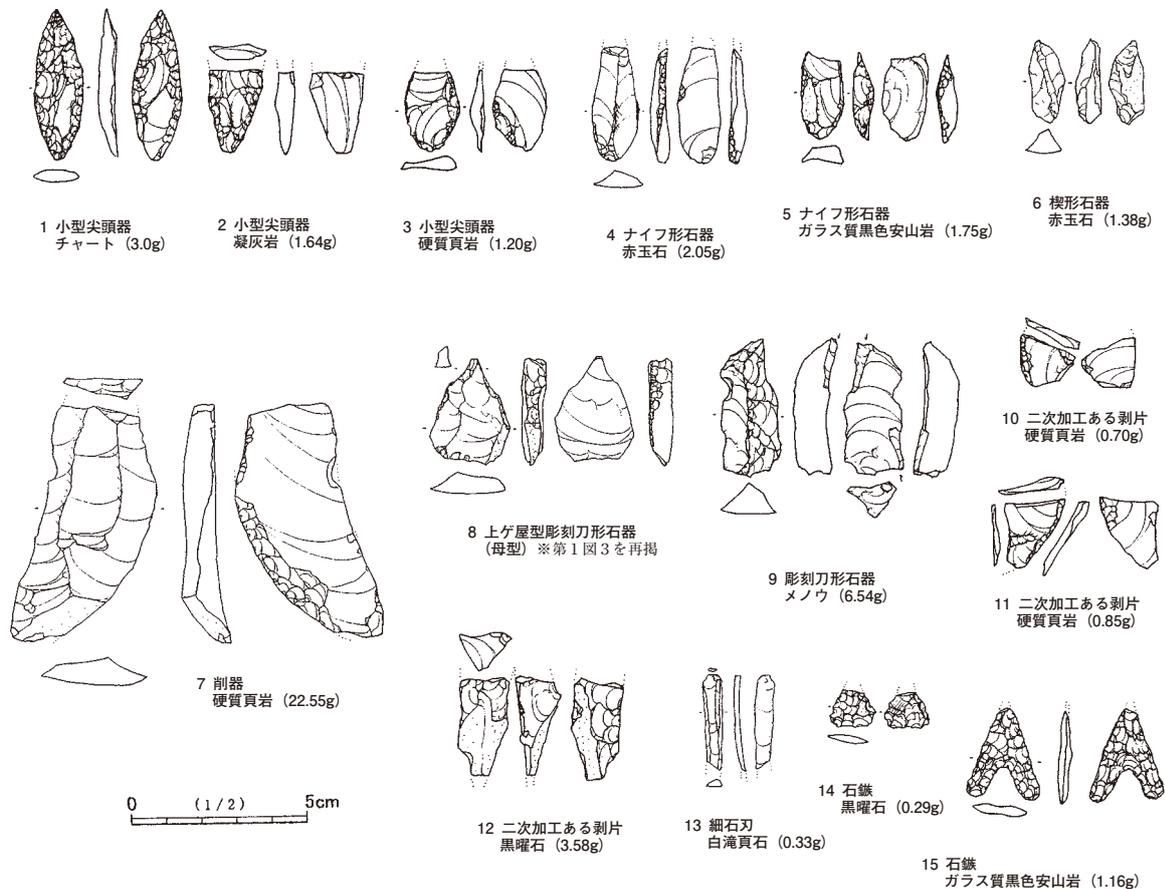
(2)光明学園遺跡 砂川期のナイフ形石器を主体としたブロック内から出土した。出土層位は第1黒色帯(B₁)である。大きさは長さ2.9cm・幅1.9cm・厚さ0.6cm・重さ2.9gを測る。石材は珪質頁岩である。素材は石刃であり、彫刻刀面は右肩に一条作出されている。大きさは長さ1.0cm・幅0.6cm、打角は70°である。彫刻刀面のネガティブバルブは、数回の細かな調整により除去されており、彫刻刀面の末端も挟入状剥離によって切り取られている。彫刻刀面調整は無い。先端部には使用による磨耗痕がみとめられる。

(3)鶴ヶ里I遺跡 本遺跡の出土資料については上ゲ屋型にとどまらずすべて図化したので、参考のため併せてこちらにも紹介しておく。

第2図1～3は剥片素材の小型尖頭器である。1(大きさ：長さ4.3cm・幅1.4cm・厚さ0.5cm・重さ3.0g、硬質頁岩(東北頁岩)製)は完形で半両面加工となっている。2(長さ2.4cm・幅1.6cm・厚さ0.5cm・重さ1.64g、凝灰岩製)は先端部が欠損した片面加工の資料である。3(長さ2.4cm・幅1.6cm・厚さ0.4cm・重さ1.20g、硬質頁岩(東北頁岩)製)は周辺加工で、先端部が欠損している。4・5はナイフ形石器である。4(長さ3.3cm・幅1.3cm・厚さ0.5cm・重さ2.05g、赤玉石(碧玉)製)は石刃を素材とした二側縁加工のナイフ形石器であり、先端部が欠損(衝撃剥離?)している。石材が上ゲ屋型に多用される赤玉石である点が興味深い。5(長さ2.6cm・幅1.3cm・厚さ0.6cm・重さ1.75g、ガラス質黒色安山岩製)は切出形を呈する。横長剥片を素



第1図 上ゲ屋型彫刻刀形石器の追加資料



第2図 八街市鶴ヶ里 I 遺跡の採集資料(高野安夫コレクション)

材としており、二側縁加工となっている。6(長さ2.5cm・幅1.1cm・厚さ0.7cm・重さ1.38g、赤玉石(碧玉)製)は完形の楔形石器である。長軸方向の上下両端にツブレが生じている。7(長さ6.9cm・幅4.0cm・厚さ1.2cm・重さ22.55g、硬質頁岩(東北頁岩)製)は削器、8は先に紹介した上ゲ屋型の母型(長さ3.1cm・幅2.3cm・厚さ0.6cm・重さ4.56g、メノウ製)である。完形品であり、石刃ないしは縦長剥片を素材としており、再加工の進行により、寸詰まりになっている。9(長さ3.9cm・幅1.7cm・厚さ0.9cm・重さ6.54g、メノウ製)は彫刻刀形石器である。稜付石刃を素材としている。上下両端に各1条の彫刻刀面が観察される。10~12は二次加工ある剥片である。10・11が硬質頁岩(東北頁岩)製、12が信州系の黒曜石製となっている。13(長さ2.8cm・幅0.6cm・厚さ0.2cm・重さ0.33g、白滝頁岩製(玉髄質岩:柴田・大森2021))細石刃であり先端部が欠損している。14・15は石鎌であり、14は平基無茎鎌、15は三角形の凹基無茎鎌となっている。14は信州系黒曜石製、15はガラス質黒色安山岩製であり、ともに先端部が欠損している。

以上の資料については、採集品という制約はあるが細石刃1点と石鎌2点のほかは、石刃石器群が基調となっており、上ゲ屋型はこれに伴うものと考えられる。**(4)内野第I遺跡** 二か所のブロック(報文「ユニット1」、「ユニット2」)から計3点の関連資料が出土している。

出土層位はいずれもソフトロームであり、ユニット1はナイフ形石器や搔器を主体としており、これに上ゲ屋型(報文天地逆)が2点加わる。4a(長さ3.7cm、幅1.2cm、幅0.9cm、重さ2.9g)は稜付石刃を素材とした彫刻刀形石器である。稜付石刃を素材としており右肩に一条の彫刻刀面が作出されている。使用により先端が摩耗している。石材は信州系黒曜石である。4b(長さ3.0cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm、重さ1.3g)は母型である。信州系黒曜石製の石刃を素材としている。

第2ユニットは、小型尖頭器を主体とした一群であり、これに彫刻刀形石器が加わる。石器組成はユニット1と好対照である。4cは上ゲ屋型と捉えられる資料であり、「白滝頁岩」製の不定形剥片を素材として右肩に一条の彫刻刀面が作出されている。大きさは長さ6.1cm、幅2.3cm、厚さ2.3cm、重さ24.9gを測り、上ゲ屋型のなかでは比較的大型の部類に属する。また素材も特異である。

(5)梨子木(なしのき)L遺跡 遺物は剥片類と礫が主

であり、利器は本例が唯一である。出土層位については不明である。

大きさは長さ2.59cm・幅1.56cm・厚さ0.58cmを測る。石材はチャートである。

諸般の事情により実見が叶わず、素材を含め詳細は不明であるが、実測図から判断すれば、彫刻刀面は右肩に二条作出されており、その後挟入状剥離により、その末端が切られているようである。

本例は群馬県初の上ゲ屋型として特筆される。

(6)野上槻(のがみつきぬき)遺跡 本例是那珂市在住の渡辺明氏による採集品である。メノウ製の縦長剥片を素材としており、右肩には一条の彫刻刀面が作出されている。大きさは長さ5.1cm、幅4cm、厚さ1.6cm、重さ28.1gを測る。彫刻刀面(長さ3.3cm、幅2.9cm、刃角70°)の中央部にはガジリ(新たな損傷)が部分的にみられる。

(7)多功南原遺跡 第13ブロックから出土した上ゲ屋型の母型である。出土層位はソフトローム(VI層)であり、石器群の主体は砂川期のナイフ形石器である。本例は接合資料であり、大きさは接合状態で長さ2.9cm・幅1.9cm・厚さ0.6cm・重さ2.9gを測る。石材は初出の高原山産黒曜石である。石刃を素材としており、先端部が二側縁に施された急角度な挟入状剥離により錐状に整形されている。

2 関連資料の再検討(第3・4図)

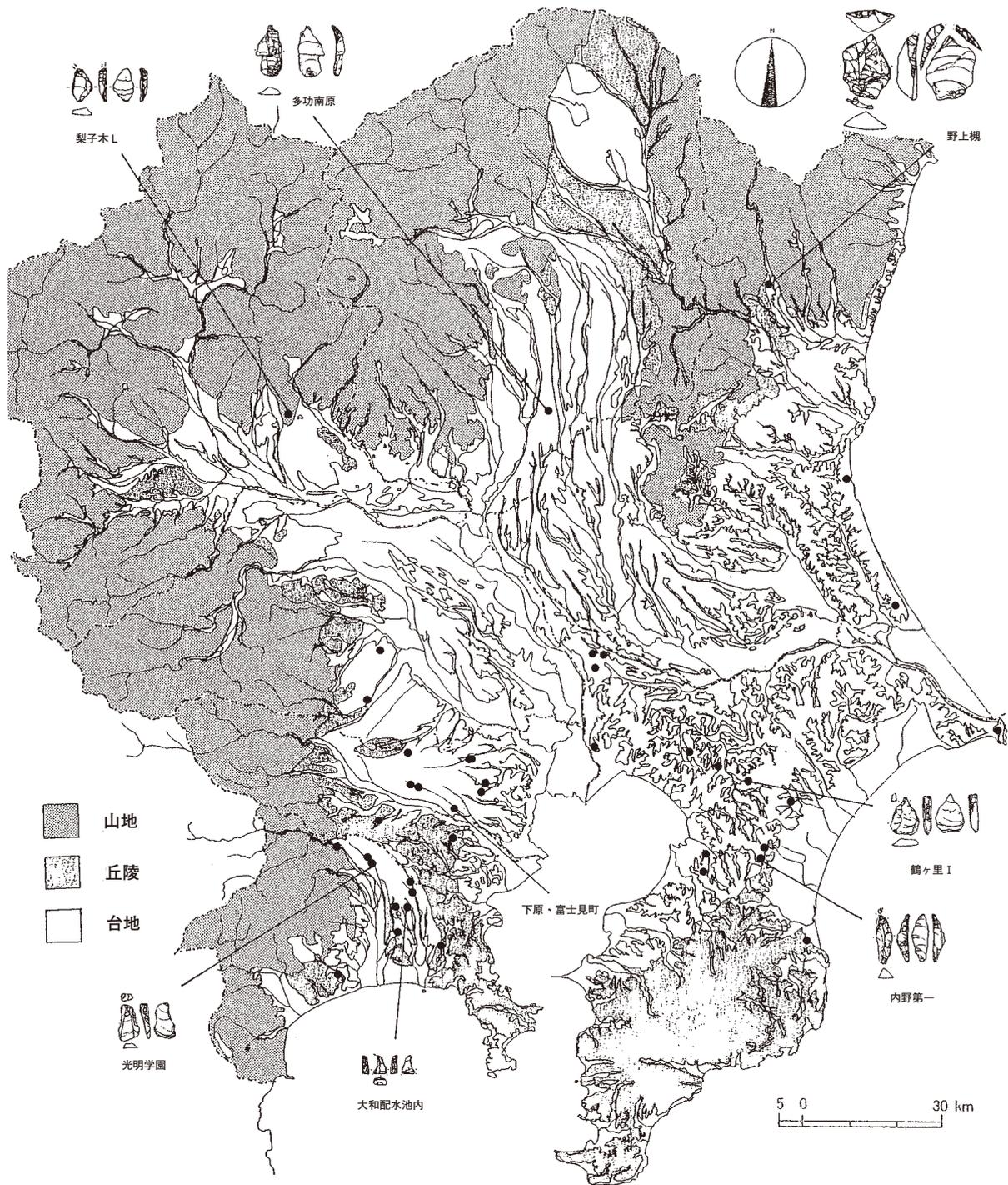
直近の集成では、全国で遺跡数が55遺跡、資料数は183点であったが、今回、これに7遺跡9点加わることとなった。このほかの関連資料としては、東京都調布市・三鷹市 下原・富士見町遺跡の左刃の「類上ゲ屋型彫器」(以下「類上ゲ屋型」)もあるが(野口ほか2015、鈴木2015・2017)、当該資料についてはその重要度と特殊性に鑑み別途後述した。

(1)遺跡分布

分布域については、南関東(下総・武蔵野・相模野)と愛鷹・箱根山麓を核地域として、茨城・福島、長野方面に波及している。微視的には、分布の東端に谷地前C遺跡を新たに加えたが、大枠では先の所見と大差はない(橋本2016)。

このような遺跡の分布状況は、南関東を中心とした砂川期のナイフ形石器を主とする石器群のそれとよく調和している。すなわち砂川的な石器群に伴うという言い換えが可能なのである。

ただし、砂川期の中でも少数派であることから、そ



第3図 上げ屋型彫刻刀形石器の関連遺跡分布図(1)関東(非表示の遺跡は橋本2010・2016・2018b参照)

の存続期間は相対的に短期間であり、突如登場し、その後急激に消滅した観がある。

(2) 技術形態学的特徴

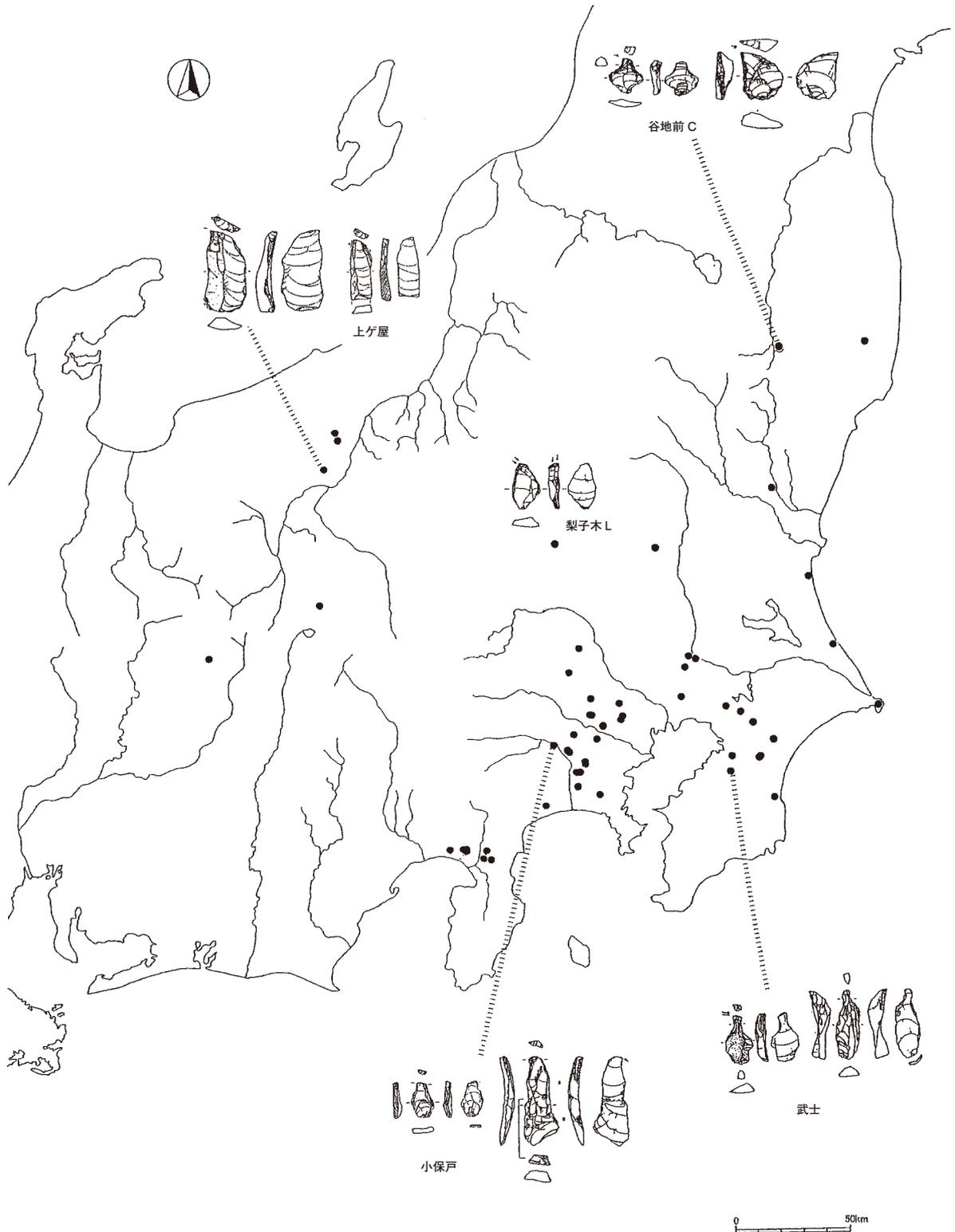
次に以上の新事実をもとに、資料の技術的特徴、さらに工程を再度検討する。

① 大きさ・形態

完成品は157点を数える。地域別では、長野県10点、愛鷹・箱根山麓39点、相模野台地27点、多摩丘陵6点、

武蔵野台地31点、下総台地35点、茨城・福島県8点、群馬県1点となっている。

大きさ(完形品126点)は、長さ1.2cm~7.2cm(平均値3.4cm)、幅0.8cm~5.8cm(平均値2.4cm)、厚さ0.3cm~2.1cm(平均値0.8cm)、重さ0.6g~49.5g(平均値4.9g)の範囲にあり、特に長さ1.5cm~5cm、幅1.5cm~2.5cm、厚さ0.3cm~1.2cm、重さ3.1g~4.0gに集中する。欠損率は18.7%(29/155)であり、内訳は基部欠損16



第4図 上ヶ屋型彫刻刀形石器の関連遺跡分布図(2)全体(非表示の遺跡は橋本2010・2016・2018b参照)

点、先端部欠損2点、先端部破片10点、一部欠損1点となっている。先端部破片に比べ先端部欠損の割合が異常に低い、このことは再加工の頻度の高さの反映といえよう。

さらに、使用痕のある資料は特定の大きさに偏ることではなく、大から小まで隈なくみられる。このような

大きさの分散化傾向は、おそらく刃部の再生による石刃の徹底消費の一端を示しているのであろう²⁾。

一方、母型は都合35点を数え、全体の18.2%を占める。地域別では、長野県1点、愛鷹・箱根山麓19点、多摩丘陵1点、武蔵野台地2点、下総台地10点、茨城県・栃木県各1点となっており、相模野台地と福島県

は皆無である。箱根・愛鷹山麓の数量が突出しており、ここでは母型の比率も全体の54.3% (19/25)を占めている。

このように、完成品に比べ母型は、数量に地域的偏りがみられる。

大きさ(完形品30点)は、長さ1.7cm～4.2cm(平均値2.5cm)、幅1.0cm～2.8cm(平均値1.8cm)、厚さ0.4cm～1.1cm(平均値0.6cm)、重さ1.1g～6.9g(平均値2.9g)の範囲にある。また、中でも長さ1.7cm～3cm、幅1.5cm～2.5cm、厚さ0.3cm～1.2cm、重さ1.1g～2.0gに集中する。欠損率は14.3%(5/35)で完成品のそれに近い。

上ゲ屋型の母型は、概して完成品に比べ一回り小さく寸詰まりであり、特に長さの違いが際立っている。これに対して、幅・厚さについては、完成品とよく合致している。また最終剥離面となっている先端部付近の横位の調整加工は、彫刻刀面全体に及ぶのが通例であるが、なかに折断面や彫刻刀面の一部が残存している中間的な例もかいまみられる。

以上の技術形態学的特徴から、ここでいう母型の大半が、刃部再生途上の姿であることは確実であり、石刃を素材として、一定の幅・厚さを保ちつつ、長さのみが減じる作業の連続性が看取されるのである。

②素材

おしなべて搬入品であるため、技術基盤の詳細は不明であるが、石刃ないしは縦長剥片が主体をなしており、「砂川型刃器技法」に象徴される高度な石刃技法が基調となっている。

唯一、井の頭遺跡群吉祥寺南町1丁目E地点遺跡については、「明確な石刃は見られず、石刃より厚い剥片が選択されている。」ことから、「素材の差異は上ゲ屋遺跡と吉祥寺南町遺跡間の型式差と捉えられる属性」とする向きもある(竹岡1996)。しかし、筆者は、この事例については、著しい再加工の結果、寸詰まりとなり素材(石刃)の原形をとどめていないものと理解している。

これを含め剥片と報じられている例は石刃ないしは縦長剥片の小形化と認識され、従来の見解を否定するものではない。

③彫刻刀面の状態(第5図)

ア 彫刻刀面の位置と形態

素材が石刃ないしは縦長剥片を主体しており、「砂川型刃器技法」に象徴される高度な石刃技法が基調となっていることは、すでに述べた(橋本2010)。

彫刻刀面の位置は、「素材の頭部(打面の方向)」が102点、「末端部」が45点、その他(横・斜方向等)が6点となっている。また、一端に彫刻刀面が作出されているものは93点(単独形)、上下両端にあるものは10点(複合形・双刃)を数える。複合形の存在は石材の有効利用の一環とも捉えられよう。

一方、器体軸に対する彫刻刀面の方向については、横刃形(70度以上)は111点、斜刃形(70度未満)は19点。傾斜角は45～120度であり、70度をピークとして60～100度に集中し、平均値は80度である。また、左側縁から右方向に作出した右刃は158例、逆方向に作出した左刃は5例を数える(鈴木1996)。

イ 彫刻刀面の大きさ・数

彫刻刀面の長さとの幅の平均値は、それぞれ0.8cmと0.39cmを測る。これに対して、鈴木論文では、0.88cmと0.33cmであり、互によく調和している。

彫刻刀面の数は、1面のみが106点、2面が27点、3面以上が15点となっており、彫刻刀面の数は、1面のみが圧倒的である。ただし、仮に1面のみであっても更新の可能性があることは言うまでもない。

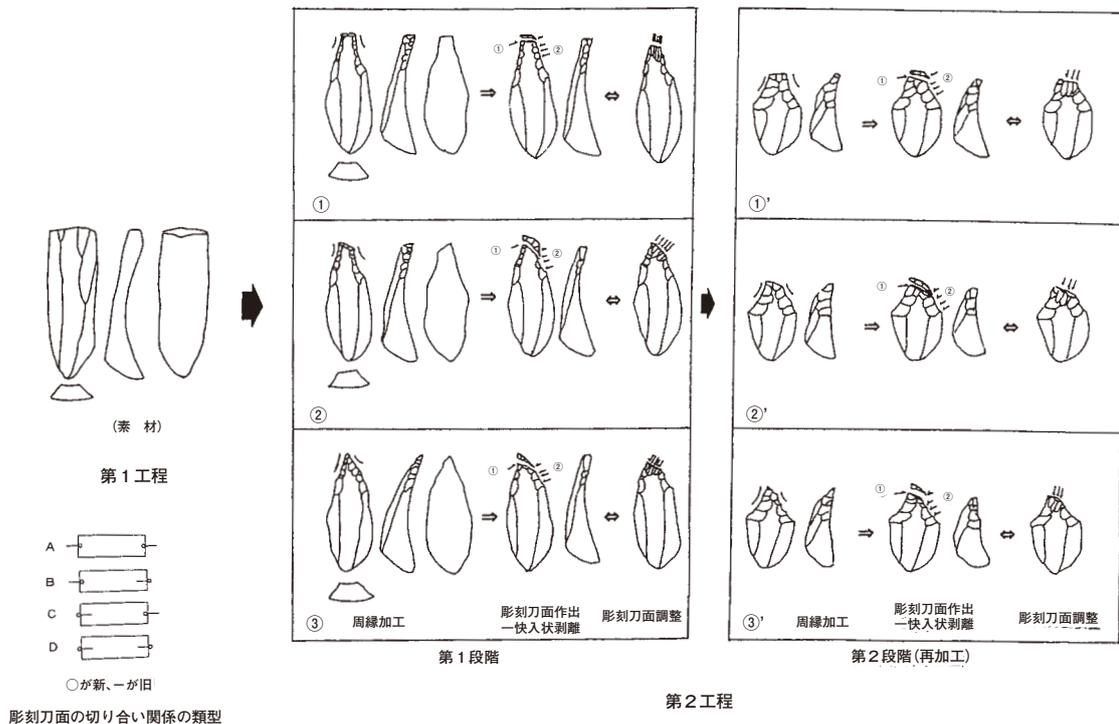
ウ 彫刻刀面調整、打面調整・挟入状剥離

彫刻刀面調整が彫刻刀面形成後に彫刻刀面から背面側に施される側面調整であることは既に述べた(橋本2010)。この種の側面調整の存在は森島によってすでに指摘されており(森嶋1966)、彫刻刀面の幅の補正(一定に保つ)や先端部の尖鋭化を目的としたものと推定されるが、上ゲ屋型の彫刻刀面調整の頻度は低く、無いものが約60%(94/151)を占める。

加えて、彫刻刀面調整のほかに、彫刻刀面のネガティブバルブの除去例(23.9%、33/138)や彫刻刀面形成後の挟入状剥離(41.6%、52/125)が見られるが、いずれも少数派である。このことは彫刻刀面形成後には、彫刻刀面調整や挟入状剥離等の調整加工がさほど行われなかったことを物語っていよう。

なお、挟入状剥離のないものもあるが、栗原中丸遺跡で4点、上ゲ屋遺跡・国府台遺跡第13地点で各1点出土しているにすぎず例外的である。

さて、次にこれらの三つの技術要素と彫刻刀面との切り合い関係について観察すると、図示したように、四つの類型が認められる。検討の対象とした99例のうち、Aは55点、Bは13点、Cは13点、Dは18点となっている。Aの数量が示すとおり彫刻刀面作出後に、挟入状剥離が施されない場合が多かったようである。更新の序列は、理論的には、A→B・C→Dの順になる



第5図 上ゲ屋型彫刻刀形石器の製作工程(基本形)橋本2018b

うが、図示したように器体の大きさによる種類の偏りはない(第5図)⁴⁾。

このことは、見方を変えれば、三つの技術要素(打面調整・抉入状剥離・彫刻刀面調整)が器体の大小に関わらず行使されていたことを物語っている。言い

換えれば作業の連続性を反映しているものとも捉えられるのである⁸⁾。

(3) 製作工程の復元(第5図)

先に示したように上ゲ屋型の製作工程は大きく素材生産(第1工程)と二次加工・再加工(第2工程)の二つに区分される(橋本2010)。

◎**第1工程** 剥片生産工程である。いずれも完成品に近い状態で遺跡内に搬入されており、技術基盤は不詳であるが、完成品の形状から、ナイフ形石器と同様に、狭長な縦長剥片ないしは石刃が素材となったことは確実である。

◎**第2工程** 素材の側縁に二次加工が施され彫刻刀形石器が製作される。この工程は加工の程度によって二つの段階(第1段階：一次作業、第2段階：再加工の段階)に大きく区分される。両者には長短の差(長形と短形)はあるものの、作業手順はほぼ共通している。また、先端部の形状も、ともに平形(①・①')、斜形(②・②')及び尖頭形(③・③')の三者に区分される⁵⁾。

また、総じて簡素な加工により省力化と材料の節約が図られ、石刃を素材にすることにより、更新後の幅

の均一化さが保証されているようである。

第1段階：素材の先端部が下端に置かれる(正位)のが主流であるが、中には上下逆(逆位)もある。

先端部を下端に置く理由は、おそらく通常の石刃下端(先端)部が主要剥離面側に向かって内湾している場合が多いからであろう。これとは逆に石刃の打面付近の縦断面は直線的であり、厚さも均一である。

次に、素材の側縁部に急斜度の調整剥離が施され、その多くは右側縁に抉入部が形成される。その後、彫刻刀面が作出されている。このような両側縁の調整は局所的であり、基部付近はほとんど調整されない。また調整剥離は急角度でありナイフ形石器との強い類縁関係をうかがわせる。

彫刻刀面の形成後には、彫刻刀面の幅の補正や先端部の形状修正を目的とした彫刻刀面調整が施され、打面調整や二次的な抉入状剥離も、しばしば見られる。

このようにして、全体の形状は、作業の進度に応じて刻々と変化(長形⇒短形)していく。したがって、上ゲ屋型の形態の多様性を理解するためには、常に工程上の位置づけを意識しなければならない。

第2段階：第2段階の母型の先端部の形状には大別、錐状と凸形の二種がある。彫刻刀面の更新を続け、ある程度寸づまり(短形)になったときには再加工されたものと推察される。このような先端部の形状は、ほとんど残存していない当初(第1段階)の姿を復元する上

での良い手がかりとなる⁶⁾。

以上の工程と冒頭に掲げた森嶋見解とは大枠では整合するが(森嶋1973・鈴木1996)、挟入状剥離と彫刻刀面調整の先後関係に限っては再考を要する。この点については既に述べたので重複を避ける。

上ゲ屋型の製作技術を端的に言えば、効率的の一語に尽きる。再加工が頻繁であり、徹底的に使い尽くすための工夫として、時として「彫刻刀面調整」、「打面調整」及び「挟入状剥離」による彫刻刀面の更新が行われている。

では、このような特定器種が出現し流布した歴史的背景はいかがであろうか。次に地域相の検討も含め若干掘り下げてみよう。

(4)使用石材と地域性(第6図)

①石材の地域性

検討に際して、まずは、分布域を7つのエリア(A～G)に区分し、砂川期と上ゲ屋型の石材を比較検討しておこう。また付随して、各地の基本石材を第9図に掲げたので、適宜、参照されたい。

A：長野県 砂川期の石材は、基本石材に準じるが、上ゲ屋型は黄玉石1点、黒曜石1点、チャート7点、灰白色凝灰質頁岩1点及び不明1点となっており、チャートが多用されている。

B：愛鷹・箱根山麓 砂川期は黒曜石(信州・箱根)、富士川ホルンフェルス(柴田2002b)及びガラス質黒色安山岩が三大石材であるが、黒曜石が他を凌駕する。この他、チャート、細粒凝灰岩等があるが、三大石材が全体の約90%を占める(前嶋2000)。

上ゲ屋型は、赤玉石5点、黄玉石9点、黒曜石5点、チャート32点(うち赤色チャート21点)、メノウ1点、灰白色凝灰質頁岩5点となっており、チャートが大勢を占める。このうち赤玉石の使用は、この地域が大勢を占め、他地域では下総で散見されるにすぎない。

C：相模野台地 砂川期には硬質細粒凝灰岩を中心に、黒曜石、箱根産ガラス質黒色安山岩、チャートが主に使用されている。このうちチャートについては、多摩川流域等、相模川流域以外の地点からもたらされたものと推定されている(柴田1996)。

上ゲ屋型は、黄玉石7点、黒玉石3点⁷⁾、黒曜石2点、チャート5点、メノウ1点、硬質細粒凝灰岩2点、珪質頁岩4点、「白滝頁岩」1点⁸⁾及び不明2点となっており、かつて鈴木次郎も指摘したように在地石材(硬質細粒凝灰岩)はあまり用いられていない(鈴木1996)。このほか「白滝頁岩」の出土(長堀北遺跡)が特筆され

る。

D：多摩丘陵 砂川期の石材はチャート・黒曜石を主としており、これにガラス質黒色安山岩・硬質細粒凝灰岩が加わる(伊藤・三瓶2000)。このような石材構成は時期を問わず、この地域の一般的なあり方といえる。

上ゲ屋型の石材構成は、珪質頁岩・黄玉石・黒曜石各2点とチャート1点となっている。

E：武蔵野台地 西井幸雄によれば、武蔵野台地における砂川期の石器石材は、二つの類型に区分できる(西井2000)。

ひとつは、武蔵野台地北東部であり、チャートが非常に高率で黒曜石がほとんどみられないとされる。ただし、上ゲ屋型が出土した富士見一丁目遺跡に限っては信州系黒曜石を主体としている。今ひとつは北東部を除く武蔵野台地全域である。石器石材は遺跡ごとの変異が大きく、チャートと黒曜石を一定量含み、多様な頁岩系石材が使用されている。

上ゲ屋型については、黄玉石3点、黒玉石2点、黒曜石12点、チャート13点(赤色チャート7点)、メノウ・硬質細粒凝灰岩・珪質頁岩各1点となっており、黒曜石・チャートの多用は、砂川期の石材傾向にほぼ合致する。

F：下総台地 砂川期の石材は基本石材と同様に多岐にわたるが、「白滝頁岩」、チャートが多く、信州系黒曜石とメノウがこれに次ぐ(永塚2000・道澤2000)。上ゲ屋型の石材は、「白滝頁岩」19点のほかメノウ7点、チャート5点、黄玉石4点、珪質頁岩3点、黒曜石3点、赤玉石2点、黒玉石2点となっており、「白滝頁岩」をはじめとしたメノウ質の石材が多い。

下総台地におけるこのような上ゲ屋型の石材の多様性の背景には、石なし県という地域特性がある。さしずめ下総は上ゲ屋型の吹き溜まりといえよう。

G：福島県南部・茨城県・栃木県 砂川期の石材は、ほぼ基本石材に準じる。北部地域は、この地域に分布するトロトロ石・珪質頁岩・石英、大洗産ガラス質黒色安山岩・チャート・メノウ・碧玉(黄玉石や赤玉石を含む)に代表されるような近隣の石材で構成されている。先に述べたように、福島県南部では以上の茨城北部のメノウ・トロトロ石に東北頁岩が加わる。

南部地域は、栃木県方面から南下した石材、武子川・姿川産のガラス質黒色安山岩を主体とした在地石材が優勢であるが(柴田2002a)、砂川期には高原山産黒曜石の減少が著しい。

一方、上ゲ屋型の石材は、茨城県(鹿島台地)と福島

県(浜通り)は、メノウ7点、黄玉石・チャート各1点。今回の栃木県多功南原は高原山産黒曜石1点となり、いずれも在地石材である。

なお、谷地前C遺跡では、茨城県北部の石材が主体であり、東北頁岩は少数派である。このことは取りも直さず、上ゲ屋型をはじめとした砂川の石器群が南関東系であることを如実に物語っている。

H：群馬県 黒色安山岩・黒色頁岩が優勢であり、県南部ではチャートが加わる。梨木子Lの上ゲ屋型はチャートとされているが、地域性からみればよく調和している。

②広域石材と地域石材

以上のように、砂川期の石材利用には、チャート、硬質細粒凝灰岩、白滝頁岩、ガラス質黒色安山岩、黒色頁岩、メノウなどの在地石材を主として、これに遠隔地石材(信州系黒曜石・東北頁岩)を補完的に用いるという特徴が見てとれる。

こうした石材利用の傾向は、関東にとどまらず、分布域全体に適用可能である。例えば笹原千賀子によれば、この頃、愛鷹・箱根山麓では、「信州系の黒曜石が母岩として大量に持ち込まれることがなくなり」、「遠隔地石材の製品搬入と在地石材の消費」が現象化するという。このことについて笹原は「信州産黒曜石は、直接採集から隣接する他集団との交換行為によっての獲得へと変化したものと」推定した(笹原2004)。

このような砂川期の石材傾向に対して、上ゲ屋型は、赤玉石2点、黄玉石27点、黒玉石7点、(信州系)黒曜石26点(信州系25・高原山産1)、チャート65点、メノウ17点、硬質細粒凝灰岩3点、珪質頁岩10点、灰白色凝灰質頁岩6点、いわゆる「白滝頁岩」20点、岩種不明3点となっている。このうち赤玉石は静岡県向田A遺跡(富樫・中村2007)と同矢川上C遺跡(柴田ほか2009)、千葉県森台古墳群(吉田ほか1983)などごく一部にとどまる。

総じて、上ゲ屋型にはスクレーパー類と同種のメノウ質の岩石が多く、珪化度が高く硬質で再生に向く石材といえるが、一方で赤・黒・黄(茶)・白・青などの色彩に対する強いこだわりも垣間見られる。

追加資料の石材構成は、チャート・メノウ・信州系黒曜石各2点、珪質頁岩・「白滝頁岩」・高原山産黒曜石各1点となっている。このうち多功南原例の高原山産黒曜石製は初出であり希少性が高い。

いずれも遺跡内で製作された痕跡はなく、完成品ないしは母型として遺跡に搬入されているが、その岩種

は広域的に流布したもの(広域石材)と地域的に限定されるもの(地域石材)の二種に大別される。前者は、チャート、黄玉石・黒玉石、黒曜石及び灰白色凝灰質頁岩、後者はメノウ、赤玉石、硬質細粒凝灰岩、「白滝頁岩」、珪質頁岩が該当する。

量的にはチャートをはじめ黄玉石や黒曜石も多用される傾向にあり、鈴木次郎が指摘したように「地域差がほとんど存在しないという特徴がある。」(鈴木1996)。このことは、広域石材を基本として、不足分を地域石材で補完する上ゲ屋型の石材需給のあり方を良くあらわしている。このあり方は、現地調達を基本とする、旧石器時代の一般的な石材傾向とは大きく異なり、この面からも上ゲ屋型の特殊性が窺える。

なお、素材供給の問題解明には母岩別資料の検討が不可欠であるが、分析例に乏しく現状では検討に堪えない。ちなみに、確認し得た80例のうち単独母岩は34例、複数母岩が46例となっている。

さて、石器石材の検討の際には、遠隔地石材と在地石材という用語が一般的に使用されているが、これは特定の地域や地点からみた、石材流通の相対的な見方であり、一定の範囲を製品として流通し、しかも地域性を超えて同様の岩種を共有した上ゲ屋型の動態を検討する際には、これとは別の概念が必要になる。「遠隔地石材」と「在地石材」を「広域石材」と「地域石材」に言い換えた所以である。

ただし、広域石材は、必ずしもその産地や採取地が1か所に限定されることを意味しない。特に黒曜石以外の石材については、産地が複数にわたる可能性があり、別途検討を要する⁹⁾。

3 上ゲ屋型集団の意味するもの(第6図)

砂川期の石器群は、伊藤健の言うように極めてローカルな石器群なため対象を絞り込みやすく、他の石器群との区別が付きやすいのが特徴である。こうした石器群の特性から特定集団の領域や動態を考察する上で恰好の材料になるものと考え(伊藤2000)。

上ゲ屋型を指標にすれば、まず、福島県南部・茨城県、常総、南関東、愛鷹・箱根山麓、長野県を包括した一つの分布域が設定できる。このエリアはまさしく、「砂川」石器群の分布範囲といえよう。

(1) 遺跡分布の見かけと実際

さて、鈴木次郎によれば、関東地方の中でも「大宮台地以北の北関東にはほとんど分布せず、関東地方に東西、あるいは南北の地域差が存在することがこの彫

器の分布から窺える。」という(鈴木2000)。

しかしながら、実際はどうであろうか。

森嶋秀一によると、栃木県では各都県に比べ、全体的に旧石器時代の遺跡数が少なく、地域的には南部に偏る。これは調査の立ち遅れが主因と考えられる。ただし、群馬県ほどの時期的な増減がみられるわけではないし、砂川期の遺跡も比較的まとまった遺跡が多い。

栃木県の代表例としては、小山市八幡根東遺跡・同本郷前遺跡、上三川町多功南原遺跡がある。ガラス質黒色安山岩、珪質頁岩、メノウ、黒曜石、及び東北頁岩が使用されており、茨城南部、下総北西部とは地域的なつながりが認められる(森嶋2002)。

また、大宮台地は上ゲ屋型の空白地域になっているが、東西に隣接する下総台地と武蔵野台地の状況と、砂川期の遺跡の存在を加味すれば、将来的に発見される可能性は高い。

群馬方面では立川ロームⅣ下・Ⅴ層段階から砂川期、すなわち群馬編年(小菅2004)の第Ⅲ期～第Ⅳ期前半に遺跡数がかかり減少するが、関口はこの現象の背景として、群馬編年Ⅲ期の浅間山起源As-BPGroup(板鼻褐色軽石群)の降下と浅間・黒斑火山の山体崩壊に伴い発生した前橋泥流(前橋台地の基盤)による利根川扇状地の埋没が石器石材採取地や狩場の壊滅をもたらしたため、旧石器人の移動範囲が変化し、結果として前橋台地の周辺地域に遺跡を残す機会が減少した可能性を考えている(関口2008・2010)。

また併せて、「碓氷峠越えの碓氷川ルートと内山峠越えの鐫川ルートの二つの信州黒曜石原産地ルートの遮断」「北西部を経由した武蔵野台地と信州黒曜石原産地を結ぶルートは変更を余儀なくさせられた」と言及している(関口・麻生2008)。

以上のように、群馬方面の遺跡の希少性については、自然災害による生活環境の悪化を指摘しており、現在、これが有力な説となっている(関口2008・2010)。

このことを念頭におけば、群馬方面の遺跡分布の僅少性は、みかけの可能性が高い。

(2) 遊動領域の設定

次に、分布域の石材構成から集団の領域について検討してみよう。

分布圏の東西の北端に位置する上ゲ屋遺跡と谷地前C遺跡では、上ゲ屋型以外の石器に東北頁岩が用いられている。このことから東北地方の集団との交流も想定されるが、その一方で東北頁岩製の上ゲ屋型がないことから、一定の領域を固定的に巡回する上ゲ屋型の

特性も窺われる。

これを受けて域内の石器石材をみると、広域石材は黄玉石が全域、信州系黒曜石と赤色チャートが長野(A)～武蔵野台地(E)、灰白色凝灰質頁岩が愛鷹・箱根山麓(B)を主体として長野(A)と下総台地(F)で少数、非赤色チャートが長野(A)～武蔵野(E)を主体として下総台地(F)では少数みられるにすぎない。このように広域石材の数量は西高東低であり、東に向かって従って漸減する傾向にある。

一方、広域石材を補完する地域石材は、メノウが下総台地(F)と福島県南部・茨城県(G)、白滝頁岩が下総台地(E)、硬質細粒凝灰岩は相模野台地(C)、赤玉石が愛鷹・箱根山麓(B)に偏る。

以上の使用石材の傾向は、分布域全体では上ゲ屋型を媒介とした相互の交流があったことを示しており、子細にみれば、武蔵野台地(E)と下総台地(F)の間に境界線が設定できる。

ちなみに、この付近には群馬方面から東京湾に向かって古利根川が奔流しており、あたかも古利根川に境に領域が東西に二分されるかのようである。

(3) 地域間の相互交流

この頃、信州系黒曜石産地を中心としたネットワークになかで、関東への有力なオプシディアン・ロードのひとつである群馬方面が、火山災害(前橋泥流の発生)に伴い途絶した可能性が高いことは既に述べた。

その一方で、信州系黒曜石の確保に向けて、既存の富士川ルート(富士川—諏訪湖—野尻湖)が重要視されたことが想定される。

総じて、上ゲ屋型の関連遺跡の分布密度は砂川期のそれに比例し、愛鷹・箱根山麓でも同様の傾向にある。

翻って、一般に製品は距離と方向に比例して、大きさが長形から短形、さらにメンテナンスの関係で二次加工率が高くなる。

上ゲ屋型の関連遺跡では製作痕跡がなく、製品として流通したことは自明である。また、他の彫刻刀形石器に比して母型が多く、その利用頻度は高いものと推定される。

上ゲ屋遺跡・上ノ原遺跡の上ゲ屋型が素材の石刃を彷彿とさせる程、大型で長形であるのに比べ、愛鷹・箱根山麓の上ゲ屋型は小型で短形であり、しかも二次加工率が高い。特に再加工の結果と思われる、短形(寸詰まり)の母型が他地域を凌駕し(19/57)、中には追平B遺跡のように母型が全体の約75%(6/8)を占める極端な例もある(廣瀬2006)。

また加えて上ゲ屋遺跡の石材のセット関係(赤色チャート、灰色・緑色チャート、黄玉石、灰白色凝灰質頁岩)は愛鷹・箱根山麓に最も近く、相互の緊密な交流関係が想定される。特に信州系黒曜石とセット関係のある赤色チャートが気になるところである。

長野方面の赤色チャートについては、既に中村由克が、松本市奈川の流域に分布する良質のチャート「奈川赤褐色チャート」の可能性を指摘している(中村2013)。むろん、赤色チャートは、黄玉石と同様に域内で採取可能であり、複数の採取地・産地の可能性は否めないが、長野方面から南関東に至るまで、距離と方向に比例してサイズが小型化し、かつ執拗な再加工がみられること、数ある石材の中で信州系黒曜石と常にセット関係にあることを考慮すれば、長野方面で製作された上ゲ屋型が古利根川付近まで製品として搬入された可能性は高い。そして、信州系黒曜石や赤色チャート製の上ゲ屋型の欠落した古利根川以東では、メノウや「白滝頁岩」のような地域石材によって、その欠落を補ったのであろう。

ただし、以上の見解は、必ずしも西からの一方通行を意味しない。例えば相模野台地(C)の長堀北遺跡の「白滝頁岩」製の上ゲ屋型は、あるいは下総台地(F)における「赤玉石」製のそれは、東西方向の活発な地域間交流の産物と考えられる¹⁰⁾。

このように上ゲ屋型の石材構成からは、長野を起点として、愛鷹・箱根山麓や南関東を介し、東北南部に至る砂川集団の領域とその巡回の様が垣間見られる。その際、古利根川が、領域内における東西交流の接点となった可能性は高い。

4 「類上ゲ屋型彫器」を巡る諸問題(第7図)

類上ゲ屋型 「類上ゲ屋型彫器」(以下「類上ゲ屋型」)とは、鈴木美保によって提唱された石器型式である(鈴木2015・2017)。標式遺跡の下原・富士見町遺跡は東京都三鷹市と調布市の市境に位置する。類上ゲ屋型のまとまった唯一の事例であり、「類上ゲ屋型」18点(第7図1～18)と母型2点(第7図19・20)が出土している。上ゲ屋型が右刃であるのに対して類上ゲ屋型は左刃であり、それ以外の基本属性はほぼ合致している。

出土層準と一括性の問題 当該遺跡ではおおむね立川ローム第Ⅳ層中部から出土したとされるが、報告者もまとめて吐露しているように、細部において問題が無いわけではない(鈴木美保2015)。ここでは、立川ロームⅢ層(ソフトローム層)・Ⅳ層(Ⅳa層・Ⅳb層・Ⅳc

層に細分)を垂直区分帯11～19の9枚区分(標準層序では厚さ約1.2m)。各区分帯の垂直分布は薄く(おおむね20cm～40cm)、部分的に重なりあっている。特に、「類上ゲ屋型」が最も集中したBL1502とBL1301・1302・1305・1313とBL1403・1406・1412・1413・1424～1426とは平面分布が重複しており、また角錐状石器は垂直区分帯12、15、17、18、有樋尖頭器は垂直区分帯12～16、18、類上ゲ屋型・細原型は垂直区分帯12～16から出土している。

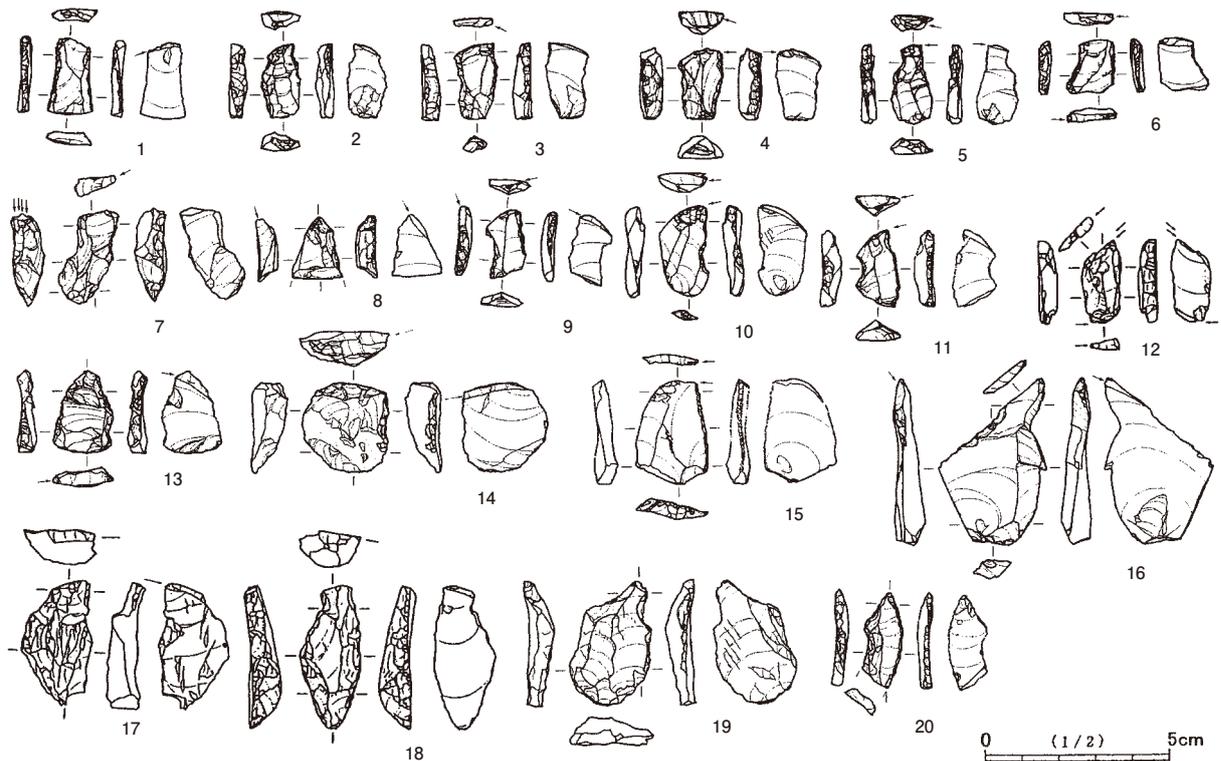
このような過度の細分の結果、複数期の遺物の混在(特に垂直区分帯15・16)が生じている。したがって、下原・富士見町遺跡の調査所見については、一括性に難があり、まして、類上ゲ屋型と細原型の共存についても疑義を抱かざるをえない。

類上ゲ屋型の評価と問題点 以上の成果を受けて、鈴木次郎は上ゲ屋型→類上ゲ屋型→細原型という変遷案を示し、併せて従来の上ゲ屋型の左刃例を類上ゲ屋型の類例として再提示している。しかしこれらについては二つの問題点がある。

まず、先の下原・富士見町遺跡における垂直区分帯の是非や細原型と類上ゲ屋型との属性の隔たり(特に石材面＝東北頁岩と玉髓質岩(柴田・大森2021)の対比)が懸念される。

次に、年代差というよりも利き手の関係が想定される。この点については、すでに鈴木美保が指摘しており、筆者もこれに賛同するものである(鈴木2017)。ちなみに、左刃優勢の有樋尖頭器、荒屋型、神山型でも少ないながら右刃が存在することはすでに指摘されている(阿部2007・橋本2017・2018a)。このことを加味すれば、右刃優勢の上ゲ屋型、左刃優勢の細原型にして、左右逆の少数派が存在した可能性が高い。したがって、従来の上ゲ屋型¹¹⁾を単純に類上ゲ屋型に読み替える際には、慎重を期すべきである。また、唯一のまとまった資料である下原・富士見町例にしても、上ゲ屋型の左利き集団(もしくは個人)による行為を前提とすれば、類上ゲ屋型については、上ゲ屋型の亜種というよりもむしろ上ゲ屋型の範疇で捉えるべきであろう。

ちなみに、我が国の彫刻刀形石器の多くが、左刃優勢で主要石材が東北頁岩や黒曜石である。これに対して、上ゲ屋型は右刃で、主要石材にはメノウ質の広域石材が用いられており、ひときわ異彩を放っている。もしも左右の彫刻刀面の位置の違いを利き手の関係とするならば、両者に機能の差があったと考えざるを得



第7図 下原・富士見町遺跡出土の「類上ゲ屋型」(鈴木美保2017, 鈴木次郎2018から作成)

ない。ちなみに芹沢長介による子細な観察によれば、我が国の彫刻刀形石器の使用痕は、「刃先の部分ではなく、多くは溝状剥離の中央に近い部分」にみられたという(芹沢1974)。大多数の彫刻刀形石器はこのようにいわば側刃形であるが、先端が尖る先刃形の上ゲ屋型は、側縁にとどまらず刃先全体(しばしば磨耗痕を伴う)が使用されている。このことが彫刻刀面の左右の違いに反映されたものと思料される。このような機能の差を考慮すれば、上ゲ屋型と他の彫刻刀形石器とは同列では捉えられないのではないだろうか。

細原型設定の問題点 さらに、大きな問題として細原型の設定の是非がある。当該型式については、館野孝の提唱(館野ほか1982)を受けて、これまで鈴木次郎が「頭部・末端部を問わず素材端部の背面側右側縁に調整剥離による彫刀面打面を設け、そこから左側縁に向かって彫刀面を作出した彫器」と広く捉えた上で、多角的な資料操作を行っている(鈴木1997)。そして、有樋尖頭器との密接な関係性を繰り返し強調している(鈴木1997・2018)。

鈴木によって細原型とされた資料は、有樋尖頭器の素材生産及び製作・再加工に生じた様々な剥片や削片を素材としており、形態の多様性は必然と言えよう。また、当然のことながら石材面でも結びつきが強い。このように細原型と有樋尖頭器とは製作技術の点で不

可分の関係にある。したがって、当該型式については一個の独立した石器型式とは考え難く、その型式認定には勢い慎重にならざるを得ない。

否むしろ、以上の諸特徴と調整加工の簡略化を考慮すれば、細原型なるものの多くは粗製の有樋尖頭器(特に東内野型)ないしはその未成品と考えられ、有樋尖頭器の枠組みで十分理解が可能ではないだろうか。

ちなみに、最も関連遺跡が集中する下総台地では、東内野型を含む有樋尖頭器は、樋状剥離による刃部の付け替えが可能な切出形の石器と捉えられる。加えてこのような有樋尖頭器のリダクションと遠隔地石材の使用に関しては、運搬仕様の一環とみなすことが可能である。

この場合には、製品化(品質保証と規格性の確保)、可搬性(軽量化)、多目的性、反復(リダクションとそれに堪える石材=東北頁岩)、耐久性(東北頁岩)がキーワードとなり、遠隔地石材(東北頁岩、玉髓、信州系黒曜石)による装備の不足分はガラス質黒色安山岩やチャート等の在地石材(現地調達)で補う構図がみとれる。

その意味では、「石器石材産地のほとんどない下総台地の環境に適応して、石器の頻繁なリダクションをするという、少ない石材を有効に活用する戦略を取ることによって、東内野型尖頭器石器群を代表とする下

総台地独特の石器文化が成立した」とする道澤明の評価(道澤1994)は適切といえよう(橋本2017・2018a)。

いずれにしろ、細原型は有樋尖頭器の系譜に属する。よって他の彫刻刀形石器との比較検討に際しては、細原型ではなく有樋尖頭器を対象とすべきである。仮にそうしたところで有樋尖頭器と上ゲ屋型・類上ゲ屋型とは、先述したとおり、機能の差が歴然としており、同一レベルでの比較検討にはなじまないものとする。

おわりに

以上のように、上ゲ屋型に関する新資料の紹介を行い、併せて、関連資料との比較検討を試みた。

前者については、北関東への分布の広がり(栃木県多功南原遺跡・群馬県梨子木L遺跡)の確認と下原・富士見町遺跡出土の類上ゲ屋型の検討が主な論点といえる。下原・富士見町については、今のところ、左刃がまとまった唯一の事例であり、利き手の問題を含め、確たることについては、今後の資料の蓄積を待ちたい。

後者については、技術的特質の再検討を端緒として、上ゲ屋型集団の領域論に言及した。技術的特質については、製作工程の再検討を柱とした。その過程で技術、機能及び石材について、新たな知見を得るとともに、上ゲ屋型の型式内容をさらに明確化した。次いで、領域論については、主に石器石材から検討した。繰り返しになるが「砂川」石器群は、極めて地域色が濃く、短期間に姿を消したために、当該集団や領域を考える上で有効な枠組みとなる。そして上ゲ屋型は、その中であって検討の際の重要な指標となった。

たかが石器、されど奥が深いようである。

謝辞

執筆に当たり以下の方々・機関に御指導・御協力を賜りました。特に、高野安夫氏には、作図や未報告資料の公表に当たり特段の御配慮を頂いた。末筆ながら謹んで御礼申し上げます。

相模原市立博物館、大和市教育委員会、桐生市教育委員会、常陸大宮市教育委員会、公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター。高野安夫、加部二生、山岡磨由子、島立桂(順不同・敬称略)。

注

- 1) 森嶋による上ゲ屋型の型式内容は、以下のとおりである。
①石材に珪岩、凝灰岩、頁岩があり、バラエティがある。②1～2稜の石刃を用いている。③打面の方向を彫刻刀刃部の

方向とする。④打面に近い左側縁に主要剥離面に対してほぼ直角に近いナイフ形石器の背部加工の刃潰しのような小剥離を入れる。⑤それを打面として一打が加えられ、彫刻刀面が作出されるが、それ以前に右側縁に挟入状の小剥離が作られている。⑥加撃による彫刻刀面の長さは、あらかじめ⑤の挟入部の位置によって意図されているといえる。⑦彫刻刀面と主要剥離面とのなす角度は90度に近い。⑧なお、先端部は打面となった小剥離部に再調整が行われ、先端部は、かなりずるとどとがる。⑨これはおそらく⑤と⑥の間に入るものと考えられるが、彫刻刀面その巾を三耗前後になるよう、あらかじめ調整されたものと思われる剥離痕が先端部背面に並んでいる。⑩刻器使用痕は、先端部と主要剥離面と彫刻刀面のなすedgeにある。主要剥離面からの加圧による刃こぼれが見られる。⑪彫刻刀面の加撃角は約70度をなす。⑫正面左肩の先端は猛禽類の嘴状に鋭く調整される。

このような森嶋の認識は上ゲ屋遺跡にとどまらず、上ゲ屋型全体の型式内容として、現在でも基本的に首肯しうるものである(森嶋1973・鈴木1996)。

- 2) なお使用痕の残存率は21.8%(彫刻刀面:35/160)である。内訳は先端部・側縁部等の刃こぼれが24例、磨耗痕11例となっている。使用痕の出現頻度が低いことについては、すでに鈴木次郎や柴田亮平によって指摘されているが(鈴木1996、柴田2009)、徹底的な反復(刃部再生及び彫刻刀面調整等)に比べ、使用痕の出現頻度が低い。裏を返せばこのことは、むしろ頻繁な刃部の付け替えのあかしなのであろう(橋本2010)。
- 3) この中には、更新時と使用時の二通りの資料がある。念のため、さらに使用時(使用痕のあるもの)を抽出すると、Aは9点、Bは3点、Cは2点、Dは7点となっており、同様に種類の偏りはなく分散化の傾向にある。
- 4) その一方で、武士遺跡(B)、下鈴野遺跡(D)、及び東京都吉祥寺南町1丁目E地点(A)では、それぞれ偏りが見られるが、おそらくこれは遺跡単位の作業の段階差を示しているであろう。
- 5) 長さが幅の2倍以上を長形、2倍未満を短形とする。
- 6) 当初から寸詰りという考え方を必ずしも排除するわけではないが、石刃を素材とすることによって一定の幅が保持される、という原則を考えれば、その存在は例外的といえよう。
- 7) 黒玉石は、「硬質頁岩」と認定されてきたものである。正確な岩種は不明であるが、東北頁岩とは異なり碧玉質で特殊な石材といえる。詳細な分析は今後の課題であるが、黄玉石の黒味の強いものとの印象がある。
- 8) 「白滝頁岩」ないしは玉髓頁岩については拙稿(橋本2015)と柴田・大森2021を参照願いたい。
- 9) 今のところ産地分析により、明らかにされているのは黒曜石のみである。栗原中丸遺跡(藁科1998)と初音ヶ原B遺跡第1地点(鈴木・芦川1998)で各1点(和田峠と霧ヶ峰系第1類)、矢川上C遺跡で2点(諏訪星ヶ台群)(柴田2009)分析されているにとどまり、極めて少数である。ただし、肉眼的には多功南原例(高原山産)のほかは信州系と言える。
- 10) 関連して、箱根山麓の陰洞E遺跡では、同一層準から「白滝頁岩」製削器が1点出土している(芦川・池谷1994)。
- 11) 鈴木論文第5図179～189参照(男女倉B・柳又B・ICULoc.15・吉祥寺南町1丁目E・中砂・栗原中丸V・長堀北VI・下鶴間長堀III)(鈴木2018)。

引用・参考文献

- 芦川忠利・池谷初恵 1994『五輪・観音洞・元山中・陰洞』三島市教育委員会
- 麻生順司 2012『神奈川県大和市上草柳遺跡群大和配水池内遺跡Ⅱ 発掘調査報告書—本文編—』大和No199遺跡発掘調査団
- 阿部朝衛 2007「旧石器時代の利き手の研究法」『日本考古学』第23号 pp.1-18 日本考古学協会
- 伊藤 健 2000「趣旨説明『石器文化研究9 シンポジウム砂川—その石器群と地域性—』pi石器文化研究会
- 伊藤 健・三瓶裕司 2000「石器組成とブロックの規模からみた「砂川」—石器経済活動の空間的組織—」『石器文化研究9 シンポジウム砂川—その石器群と地域性—』 pp.209-234 石器文化研究会
- 加部二生・新井雅幸 2016「梨子木L遺跡」『桐生市内遺跡発掘調査報告 平成25・26年度調査』 pp.3-6 桐生市教育委員会
- 川口武彦 2000「常総地域の「砂川期」遺跡—地域相把握のための基礎的検討—」『石器文化研究9 シンポジウム砂川—その石器群と地域性—』 pp.101-111 石器文化研究会
- 小菅将夫 2004「4 石器群の移り変わり」『群馬の旧石器』 pp.79-99 みやま文庫
- 小菅将夫 2002「周辺地域の様相—群馬県」『シンポジウム茨城県における旧石器時代研究の到達点—その現状と課題—発表要旨・資料集』 pp.95-104 茨城県考古学協会
- 笹原千賀子 2004「愛鷹・箱根山麓第3期の石器群 - 第3期から第4期へ、寺林遺跡の編年の位置」『財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所設立20周年記念論文集』 pp.73-86
- 柴田 徹 1994「使用石材からみた旧石器時代の南関東における地域性について」『松戸市立博物館紀要』第1号 pp.3-25 松戸市立博物館
- 柴田 徹 1995「南関東における石器石材について」『第3回岩宿フォーラム／シンポジウム 石器石材～北関東の原石とその流通を中心として 予稿集』 pp.50-55 笠懸野岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会
- 柴田 徹 1996「大和市を中心とした相模野台地における旧石器時代の使用石材について」『大和市史研究』22 pp.1-31 大和市
- 柴田 徹 2002a「南関東における石器石材について」『シンポジウム 茨城県における旧石器時代研究の到達点—その現状と課題— 発表要旨・資料集』 pp.19-19 茨城県考古学協会
- 柴田 徹 2002b「愛鷹山麓出土石器の石材鑑定—ホルンフェルス(頁岩)の偏光顕微鏡下の観察から—」『西洞遺跡(c・d区)発掘調査報告書』 pp.215-223 沼津市教育委員会
- 柴田 徹 2008「剥片石器に利用可能な石材の比重値について—関東地方を中心として—」『石器に学ぶ』第10号 pp.149-62 石器に学ぶ会
- 柴田 徹・大森隆志 2021「松戸市坂之台遺跡(第2地点)の旧石器石材の再検討—構成岩石種と産地の推定—」『松戸市立博物館紀要』第28号 pp.17-37 松戸市立博物館
- 柴田亮平ほか 2009「矢川上C遺跡 第二東名建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 鈴木次郎 1996「南関東におけるナイフ形石器文化の彫器(2)」『神奈川考古』第32号 pp.57-76 神奈川考古同人会
- 鈴木次郎 1997「南関東におけるナイフ形石器文化の彫器(3)」『神奈川考古』第33号 pp.1-32 神奈川考古同人会
- 鈴木次郎 2000「ナイフ形石器文化の彫器」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』 pp.517-532 大塚初重頌寿記念会編(株)東京堂出版
- 鈴木次郎 2018「細原型彫器と上ゲ屋型彫器—彫器から見た南関東のナイフ形石器石器群の多様性について—」『神奈川考古』第54号 pp.1-34 神奈川考古同人会
- 鈴木敏中・芦川忠利 1998「三島市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅵ 初音ヶ原B遺跡第1地点 赤王山古墳群 試掘調査 自然科学的分析」三島市教育委員会
- 鈴木美保 2015「Ⅳ まとめ」『下原・富士見町遺跡Ⅲ—後期旧石器時代の発掘調査(3)出土石器—』 pp.590-598 明治大学校地内遺跡発掘調査報告書7明治大学
- 鈴木美保 2017「下原・富士見町遺跡出土の「類上ゲ屋型彫器」に関する一考察」『大沼克彦教授古希記念論集 ラーフイダーン』X X XⅧ pp.61-67 国士舘大学イラク古代文化研究所
- 関口博幸・麻生敏隆 2008「関東地方北西部における火山災害と遺跡分布の関係」『考古学リーダー14 後期旧石器時代の成立と古環境復元』 pp.161-171 (株)六一書房
- 関口博幸 2008「後期旧石器時代における前橋泥流をめぐる遺跡形成史」『岩宿フォーラム2008／シンポジウム 更新世の地形発達史と遺跡群の形成 予稿集』 pp.36-43 岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会
- 関口博幸 2010「群馬における旧石器時代石器群の変遷」『岩宿フォーラム2010／シンポジウム北関東地方の石器文化の特色 予稿集』 pp.6-14 岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会
- 芹沢長介 1974「石器の種類と名称」『古代史発掘1 最古の狩人たち』 pp.64-80 講談社
- 竹岡俊樹 1996「彫刻刀形石器の再検討(下)—「荒屋型・神山型・上ゲ屋型彫器」の再検討—」『古代文化』48-9 pp.25-38 古代学協会
- 館野 孝ほか 1982『細原遺跡』北茨城市史編さん委員会編
- 塚原秀之 2013「長野市域での玉髓・碧玉利用」『石器石材のつどい第2回 シンポジウム「富山の石材と玉髓・碧玉」予稿集』 pp.35-38 石器石材のつどい世話人会
- 津田芳男・道澤 明・菅谷通保 1990『千葉県茂原市桂遺跡群』長生郡市文化財センター
- 富樫孝志・中村雅之 2007『向田A遺跡 第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(長泉工事区No.140地点)』静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 永塚俊司 2000「下総台地(印旛沼以西)の様相」『石器文化研究8 シンポジウム砂川—その石器群と地域性— 資料集成 南関東各地の基礎的検討—』 pp.159-186 石器文化研究会
- 中村由克 1995「長野・新潟における石器石材について」『第3回 岩宿フォーラム／シンポジウム 石器石材～北関東の原石とその流通を中心として 予稿集』 pp.46-46 笠懸野岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会
- 中村由克・岩瀬 彬 2008『上ノ原遺跡(第2次・町道地点)発掘調査報告書』長野県信濃町教育委員会
- 中村由克ほか 2013「チャート製石器石材の原産地と採集地の推定法」『日本第四紀学会講演要旨集43 日本第四紀学会2013年大会(弘前大学)』 pp.46-46 日本第四紀学会
- 西井幸雄 2000「「砂川」の空間的枠組みをめぐって」『石器文化研究9 シンポジウム砂川—その石器群と地域性—』 pp.53-74 石器文化研究会
- 野口 淳・鈴木美保・市川雅洋 2015『下原・富士見町遺跡Ⅲ—後期旧石器時代の発掘調査(3)出土石器—』明治大学校地

- 内遺跡発掘調査報告書7 明治大学
- 橋本勝雄 2010「上ゲ屋型彫刻刀形石器の技術的特質とその評価」『房総の考古学 史館終刊記念』 pp.1-21 史館同人・六一書房
- 橋本勝雄 2015「東日本におけるホロカ型細石刃石器群の様相とその時間的位置づけ」『旧石器考古学』80 pp.1-18 旧石器文化談話会
- 橋本勝雄 2016「上ゲ屋型彫刻刀形石器の特質とその背景—上ゲ屋型の再検討—」『旧石器考古学』81 pp.29-46 旧石器文化談話会
- 橋本勝雄 2017・2018 a「佐倉市太田・大篠塚遺跡出土の旧石器時代遺物の再評価—有樋尖頭器に関する一考察—(上)(下)」『佐倉市史研究』第30号・第31号 pp.22-49、pp.18-31 佐倉市
- 橋本勝雄 2018 b「〈研究ノート〉柏市小山台遺跡出土の旧石器・縄文時代の石器とその評価—国府系ナイフ形石器・上ゲ屋型彫刻刀形石器石器・本ノ木型尖頭器・出現期石鏃の紹介と関連資料の検討—」『研究連絡誌』第79号 pp.15-32 千葉県教育振興財団
- 橋本勝雄ほか 2019『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書 15—柏市小山台遺跡B区 縄文時代以降編—』千葉県教育振興財団
- 樋口昇一・森島 稔・小林達雄 1962「長野市飯縄高原上ゲ屋遺跡—第1次調査報告—」『上代文化』第31・32号 pp.17-31 國學院大学考古学会
- 廣瀬高文 2006『追平B遺跡』長泉町教育委員会
- 前嶋秀張 1995「第4期・第5期の石器群」『静岡県考古学会シンポジウムⅨ 愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年 予稿集』 pp.28-34 静岡県考古学会シンポジウム実行委員会
- 前嶋秀張 2000「愛鷹・箱根の石器群とその地域性—休場層下部の石器群について—」『石器文化研究9 シンポジウム砂川—その石器群と地域性— 予稿集』 pp.75-88 石器文化研究会
- 前嶋秀張・森嶋富士夫 2006「赤玉と黄玉の入手先を明らかにする」『研究紀要』第12号 pp.1-12 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 道澤 明 1994「東内野型尖頭器の出現と変遷」『古代文化』第46巻第12号 pp.14-32 古代学協会
- 道澤 明 2000「下総台地(千葉)の石器と地域性—砂川期ナイフ形石器石器群と東内野型尖頭器石器群—」『石器文化研究9 シンポジウム砂川—その石器群と地域性— 予稿集』 pp.89-100 石器文化研究会
- 三ッ橋勝・三ッ橋正夫 2002『光明学園遺跡発掘調査報告書』光明学園遺跡発掘調査団
- 御堂島正 2012「光明学園遺跡(No.190遺跡)」『相模原市史 考古編』 pp.101-102 相模原市教育委員会教育局生涯学習部博物館
- 宮本雅通 2000「大宮台地の様相」『石器文化研究8 シンポジウム砂川—その石器群と地域性— 資料集成 南関東各地の基礎的検討—』 pp.187-215 石器文化研究会
- 森嶋秀一 2002「周辺地域の様相—栃木県」『シンポジウム茨城県における旧石器時代研究の到達点—その現状と課題— 発表要旨・資料集』 pp.81-81 茨城県考古学協会
- 森島 稔 1966「上ゲ屋型彫刻器をめぐって」『信濃』18-4 pp.259-264 信濃史学会
- 森島 稔 1973「一系文化におけるグレイバー・テクニクの変遷—杉久保系文化の側面—」『信濃』25-4 pp.1-13 信濃史学会
- 森島 稔 1975「上ゲ屋遺跡」『日本の旧石器文化2 遺跡と遺物 上』 pp.206-220 雄山閣出版
- 山口耕一 1999『多功南原遺跡(旧石器・縄文編)』栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 吉田章一郎ほか 1983『千葉県山武町森台古墳群の調査』青山学院大学 森台遺跡発掘調査団
- 藁科哲男 1998「宮ヶ瀬遺跡群他出土の黒曜石製遺物の石材産地について」『宮ヶ瀬遺跡群X V北原(No.10・11北)遺跡』かながわ考古学財団